



TITLE:

京大広報 No. 575

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 575. 京大広報 2003, 575: 1387-1406

ISSUE DATE:

2003-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196528>

RIGHT:



京大広報

No. 575

2003. 1

目次

平成15年の新春を迎えて

総長 長尾 真.....1388

大学の動き

部局長の交替.....1392

新年名刺交換会.....1392

事務局消防訓練・

年末特別消防演習行われる.....1392

平成14年度の定年退職教官.....1393

平成15年度予算案の概要.....1396

部局の動き

上海センター開所披露会.....1398

大学院地球環境学堂・学舎・三才学林

創設記念行事挙行.....1399

京大病院で新駐車場・

エントランス披露式挙行.....1399

寸言

産学連携への期待

藤原菊男.....1400

随想

習慣

名誉教授 吉田 修.....1401

居心地がよかった京都大学

名誉教授 武部 啓.....1402

洛書

感謝と思い出

林 力丸.....1403

訃報

.....1404

日誌

.....1405

お知らせ

シンポジウム「法科大学院における

実務基礎科目の教育」の開催.....1406

編集後記

.....1406



京大病院外来診療棟 - 関連記事 本文1399 ページ -

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

平成15年の新春を迎えて

総長 長尾 真

新年明けましておめでとうございます。今年は私にとりまして最後の年ではありますが、京都大学にとりましても戦後50余年続いた新制国立大学としての京都大学の最後という歴史的な年になるわけであり、新しい法人としての国立大学は平成16年4月に発足の予定であります。本年は、全学共通教育の改善の使命を持った高等教育研究開発推進機構が発足するなどのほかに、法科大学院設立の準備など、いろいろと新しく計画しなければならないことがあります。特に法人化のための準備をすべき非常に重要な年であります。そこで、この1年間にどのようなことをしなければならないか、またどのような方向を目指して努力すべきか等について私見を述べ、皆様方のご参考に供したいと存じます。

1. 法人化への準備

これまでたびたび国立大学の法人化の問題について皆様にお知らせしてきましたが、ここで改めて整理しておきたいと存じます。国立大学は独立行政法人^(注)の考え方で国立大学法人となるべく、その基礎となる国立大学法人法(仮称)の法案を文部科学省で作成中であり、これは本年2月ないし3月頃に閣議決定され国会に提出され、5～6月頃に国会で成立する予定とされています。

国立大学法人化の基本的な精神は次のようなところにあります。

- (1) 個性豊かな大学づくりと国際競争力のある教育研究の展開
- (2) 国民や社会への説明責任の重視と競争原理の導入
- (3) 経営責任の明確化による機動的・戦略的な大学運営の実現

これを実現するために検討されている国立大学法人法の骨子は次のようにまとめられます。



- (1) 个性的かつ自律的な運営をするよう大学毎に法人化をする
- (2) 戦略的な運営をし社会への説明責任を果たすために中期目標・中期計画をたてる
- (3) 1つの独立した主体として全学的運営をするために役員会制を導入する
- (4) 社会に対する説明責任を重視した運営をするために学外者を参画させる
- (5) 能力重視の弾力的な人事システムを実現するために非公務員型の雇用形態をとる
- (6) 国の事前規制をできるだけなくし、第三者評価によって事後チェックを行う
- (7) 設置者である国は学長の任命や大学の目標設定等において大学の自主性・自律性を尊重する

さて、国立大学法人に移行するためには、文部科学省における各種作業の他に、各大学において様々な準備をしなければなりません。その主なものを列挙しますと次のようになるでしょう。

(1) 大学組織に関すること

役員会、評議会、運営協議会、その他、大学の組織と運営に関する規則を全て新しく作成することになる。そして平成16年4月の発足時にはこれらの組織の人選が終わっていないなければならない。全体として効率のよい大学運営・事務処理体制を作る必要があるだろう。

(注) 独立行政法人とは「公共上の見地から確実に実施されることが必要な事務及び事業であって、国が自ら主体となって直接に実施する必要のないもののうち、民間の主体にゆだねた場合には必ずしも実施されないおそれがあるもの」と定義されている。国立大学はだまかにはこの枠内でとらえられるが、その事業は教育・研究という自主性・自律性の非常に高いものであるところから、独立行政法人通則法とは別の国立大学法人法を作るという方向で法案作成作業が行われている。

（２）非公務員型の雇用に関すること

教員，事務職員，技術職員，その他，教育・研究機関である大学のニーズに合った種々の職種や雇用形態を考え，その就業規則，給与体系等を作り，労使協定を結ばねばならない。兼業兼職等は緩和されるだろうが，みなし公務員として国家公務員倫理法に準じた倫理保持がなされる。人事管理は現在の定員を基礎として国から交付される人件費総額によって大学が行うことになる。法人が新しい職員を採用する時の方法や，文部科学省から各大学に派遣されている職員の今後をどうするかということにも工夫が必要となる。

（３）財務に関すること

大学の収入は学生納付金，附属病院収入，受託研究費，寄附金等の自己努力による収入と，国から支給される運営費交付金，施設費補助金等からなる。運営費交付金の算出基礎がどうなるかは文部科学省で検討しているが，その交付を受け，大学内でどのように配分して使用するかは大学にまかされる。これをどのような考え方で配分するかによって大学の将来も変わってゆくだろう。大学の持っている資産を効率的・効果的に活用することも課題である。

（４）大学の中期目標・中期計画に関すること

６年間で単位として目標をたて，これを実現する計画を作ることになる。これと運営費交付金の算定との関係がどうなるか，また文部科学省，財務省との関係でどのような折衝によってこれが決まるかはまだ分からない。この他に毎年行うべき予算要求の手続きがどうなるかという問題もある。目標と計画のたて方は事後チェックとしての国立大学評価委員会による評価の仕方とも関係するし，評価が悪いと次の期の運営費交付金が減額されることになるという問題もある。こういったことの詳細はまだよく分かっていない。

２．法人化にあたっての考え方

国立大学の法人化が将来の我が国の人材育成と研究の発展にとってどのような影響があるかは誰にも分かりません。高等教育が全体として悪い方向に行くのではないかと心配する人もいますが，少なくと

も大学に今まで以上の自由度が与えられるのでありますから，これを最大限に活用し大学を発展させることが必要で，それはそれぞれの大学の教職員の自覚と努力，特に学長を中心とする役員会の努力にかかっているわけであります。

大学の自己努力による収入の増加をはかりながら，学内の運営を円滑かつ効率のよいものにするとともに，国からの運営費交付金を含んで，こういった所にどのように資金を投入してゆくかということが大きな問題となるでしょう。また学部・研究科，研究所・センター等の改変・新設などもかなり自由にできることになるので，各部局の合意を得ながら，京都大学の将来の発展のために限られた人的資源を有効に配置してゆく必要があります。

京都大学は学部自治を最大限に尊重してきた伝統を持ち，法人化後もその考え方は堅持してゆくべきものと考えますが，一方では独立した１つの法人として国や社会の要請に応えてゆかねばなりませんし，これからは国立大学間でもこれまで以上に熾烈な競争が行われるようになってゆく中で，各学部の考え方がばらばらで，大学として迅速に意志決定ができないという事態がしばしば起こるようなことになれば，深刻な状況を招きかねないわけであります。したがって学部自治と大学の統一的意志の形成との関係についてはよく議論し，相互理解のもとにスムーズに大学としての意志決定ができるような組織上の工夫をするとともに，こういった方向で大学構成員の十分な理解に達しておく必要があるでしょう。

法人化された後は，教職員は大学との間で契約によって雇用されるということになります。教員については大学における勤務形態の定め方，研究成果等についての所有権の帰属問題，兼業兼職の範囲・内容などを明確にしなければなりません。大学における研究は自分の創意による自分のための研究であると同時に，それが大学側の教員雇用の目的の中のものであるという微妙な関係があるということを考えねばなりません。

事務職員や技術職員などにおいては，それぞれの専門性を高め，企画力をつけることによって，それぞれの職場において責任のある判断にもとづいて仕

事をし、組織全体が効率よく動くようにしなければなりません。最も大切なことは、教員と事務系職員等はそれぞれの持ち場での活動を尊重する対等の立場にあるという認識をお互いに明確に持つことでありましょう。

3. 教育研究における改善の努力

(1) 教育

法人化されれば学生納付金は直接大学の重要な財源となるので、学生に対してはそれに対応したしっかりした教育を施し、大きな付加価値をつけた人材を社会に送り出す責務をより一層明確に意識しなければなりません。学生はある程度自由放任にしておいた方が良いのだといった時代は過ぎ去り、グローバル化した国際社会で厳しい競争をしなければならない時代に、京都大学卒業生としてふさわしい学力と識見を身に付けさせることが必要であり、そのために今以上に工夫された授業と試験をきちんと行い、きめの細かいガイダンスを行わねばならないでしょう。第三者評価機関も学生の教育実態については厳しい目で見て評価することは間違いありません。

学生に勉強をさせるためには、勉強をせざるをえない環境を作り出すことが大切でしょう。例えば京都大学の場合、学部・学科単位で入学試験を行っているので、東京大学のように自分の進みたい学部・学科への分属のために大学入学後も競争をしなければならないということがありません。入ってしまったばなんとか単位をそろえて卒業するということで、学生間の切磋琢磨の環境がないわけであります。

“だから伸び伸びと自分の好きなことができて天才的な学生ができるのだ”という声もありますが、そのような学生は競争的な環境があろうがなかろうが、自分流で適当にやるわけで、大多数の学生がしっかりした勉学への意識をもつような環境を作ることが大切であります。これからの京都大学の大きな課題であると考えます。そのためには教員自身が自分の学部・学科を学生にとって魅力あるものとし、相互に厳しく競争的に共存してゆこうという決心がなければならないでしょう。

これからの大学は国際社会の中で競争し、その存在を示す必要がでてきております。優れた学生を外国からも積極的に集められねばなりませんし、日本人学生には国際的な視野を持たせ、外国においても自分の意見をうまく述べ、相手を説得できるだけの英語力を持たせるような教育をしなければなりません。そのためにも大学のキャンパスをより魅力のあるものとし、英語による講義科目を増やし、外国人学生のための留学生宿舎を増やしていく必要があります。また学生の間競争環境を導入するためにも、大学自体の基金による奨学金を優れた成績をとった学生に支給するといったことも必要となるでしょう。

(2) 研究

これから新しく研究しなければならない分野がどんどん出てくる状況に対して、どう対応してゆくべきかということが大学の研究において最も大きな問題であります。学問はますます複雑かつ広範にわたるようになりますから、いわゆる学際的分野を急速に立ち上げ、これまで蓄積してきた成果を用いてお互いに協力しながら研究を大きく展開させてゆかねばならないといったことが起ってくるでしょう。公共政策や新しい経営学・社会学、国際政治学、心理学を中心とした脳科学、ナノテクノロジーや医工連携の分野、農学と生命科学の共働など、多くの例をあげることができます。

こういった分野の発展のために、その都度学部・学科や研究科を作るということは、その検討に長期間を必要とする等のことから非現実的であります。したがってそれに代わるものとして、既存の組織を変えずに動的に教育研究グループを編成し、そこに適当な建物スペースや教育研究費を出すといった方法を考えるべきでしょう。そしてそのグループに参加する教員は既存の組織においても一定の権限を持つといったダブルアポイント制にすれば、比較的自由に、また迅速に対応ができるようになるのではないのでしょうか。

研究の質が国際的に見て高いことが必要であることは言うまでもありません。積極的に海外に出てゆくとともに、もっと積極的に外国人研究者を採用し、教育研究に活躍してもらえるようにする必要がある

でしょう。女性教員の比率ももっと高めねばなりません。

(3) 社会貢献

これからは大学が社会に対してどのように貢献しているかを示すことがますます必要となってゆきます。優れた人材を社会に送り出すだけでなく、社会人をもっと積極的に受入れて高度な専門知識をもって帰ってもらうことも必要でしょう。社会人がクラスの中に何人かいることは、若い学生にとっていろいろな意味で良い影響を与えますし、また教員も社会経験の豊かな人が聞いているということで授業の内容・態度が改善されると言われています。京都大学の場合どのような教育目標をもって、どのような社会人を受入れるのがよいかをよく検討すべきでしょう。

社会貢献のもう1つは言うまでもなく産官学連携といった方向であります。産学協力によって大学の持つ知的資産を企業に移転することの他に、共同研究を行うことによって現実社会が持っている困難な問題を大学人がよく知り、それを学問的に解決するとともに、そこから新しい研究をスタートさせ、新しい学問を創造することもありうるわけです。産学協力において企業は大学に相当額の共同研究費を出して知識を得ようとしているわけで、契約社会の考え方の時代が大学にも来ているということでもありましょう。法人化されれば独自の収入を増やしてゆかねばなりませんが、社会や産業界との積極的な交流によって、研究資金を導入したり大きな寄附を受けたりすることに対する努力が大切となります。

4. 京都大学の将来

これからは規模の時代ではなく質の時代となってゆくでしょう。京都大学も優れた教員・研究者を集め、質の高い研究を行うとともに、優れた学生を育てる大学となってゆくべきであります。既にそのようになっていると言う人もいるでしょうが、決してそうではありません。オクスフォードやケンブリッジ、ハーバード、あるいはユニークな存在としてのカリフォルニア工科大学などを見れば、我々はもっともっと努力をしなければならないことがよく分か

るのであります。

この大学改革の時代において、嵐が通り過ぎるのを待つといった受身の態度でなく、これを真剣に受け止めて、過去を見なおし、新しい京都大学の出発のために教職員全てが努力することが必要であります。特にそれぞれの部局の自主性を認め合いながら、大学全体としてのコンセンサスを作り、積極的な相互協力をしながら、さらに良い教育と学問研究の展開に向けて努力をしてゆきたいものであります。現状に甘んじていては進歩はありません。このような変革の時にこそいろいろな新しいことが可能であり、そのためにはお互いに譲り合って協力するということが大学全体の発展のために最も大切であります。

法人化後の京都大学をどのように描くかということとは、10年、20年先の京都大学の運命を決めることでもあります。この1年が皆様の相互協力によって、法人化のためのしっかりした設計のできる年となることを期待したいと存じます。

大学の動き

部局長の交替

農学研究科附属農場長

谷坂隆俊農学研究科教授（農学専攻作物科学講座（作物科学））が、天野高久農学研究科附属農場長の任期満了に伴う後任として、1月1日付けで任命された。任期は平成16年12月31日まで。



新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月6日（月）午前10時から京大会館において、長尾 真総長をはじめ、沢田敏男元総長、井村裕夫前総長、及び名誉教授、教職員約200人の出席を得て行われた。

はじめに長尾総長から新年の挨拶があり、次いで沢田元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前11時散会した。



事務局消防訓練・年末特別消防演習行われる

12月26日（木）に事務局消防計画に基づく事務局職員の総合消防訓練が午後2時から約20分間にわたり左京消防署の指導と協力を得て行われた。

訓練は、共通管理棟2階南側事務室からの出火を想定し「訓練火事です」との通報により始まり、消



防車3台が出動し、総勢150人の参加のもと通報連絡、初期消火、避難誘導、物品搬出、警備誘導、救護等の一連の総合訓練が行われ、その後、左京消防署員の指導のもと応急処置訓練が行われた。

また、同日午後3時から本部地区自衛消防団による恒例の年末特別消防演習が実施され、消防車による放水訓練が行われた。

なお、各部局においても、次のとおり実施された。

月 日	実施部局名
11. 25 (月)	医療技術短期大学部
12. 5 (木)	宇治地区研究所
12. 9 (月)	工 学 部
12. 12 (木)	医学部附属病院
12. 19 (木)	図 書 館

平成14年度の定年退職教官

京都大学教員定年規程により、次の教官（教授54人，助教授9人，講師2人，助手15人）が、本年3月31日付で退職の予定である。

部 局	氏 名	講 座 名 等	研 究 分 野 等
総合人間学部	有 福 孝 岳	人間学科 人間基礎論講座	カント哲学を中心にしたドイツの近現代哲学の研究， 道元の禅仏教と西田哲学などの東洋思想の研究
"	稲 田 伊久穂	国際文化学科 言語文化論講座	ドイツ近現代文学とその文化・社会状況に関する研究
"	宮 本 宗 實	基礎科学科 数理基礎論講座	平衡分布の確率論的研究
文学研究科	日 野 龍 夫	文献文化学専攻 国語学・国文学講座	日本近世文学の研究。特に中国の思想・文学の与えた 影響，その日本の変容の様々な分野における研究。
"	石 原 潤	行動文化学専攻 地理学講座	農村地理学研究及び市場の人文地理学的研究
教育学研究科	山 崎 高 哉	教育科学専攻 教育学講座	ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義に関する 研究。日本における教育哲学の歴史に関する研究。
"	皇 紀 夫	臨床教育学専攻 臨床教育学講座	臨床教育学の方法論に関する研究
法学研究科	村 松 岐 夫	政治学専攻 現代政治行政分析講座	行政学の研究。とくに戦後日本の官僚制，地方自治， 政策評価，日本の政治。
経済学研究科	近 藤 文 男	組織経営分析専攻 市場・会計分析講座	戦後日本の代表的民生用電子機器企業の対米輸出マー ケティングに関する理論的・実証的研究
理学研究科	大 谷 浩	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙物理学講座	活動銀河の観測的研究
"	石 沢 俊 亮	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙物理学講座	真空の構造の研究・質量と重力の起源の研究
"	西 嶋 光 昭	化学専攻 無機化学講座	固体表面の物性，反応性と表面新物質相の創製に関す る研究
"	石 田 英 實	生物科学専攻 人類学講座	類人猿の進化と人類の起源に関する研究，その他自然 人類学に関する研究
"	小 野 博 尉	附属地球熱学研究施設火山 研究センター	火山性地震および火山における地盤変動の研究
医学研究科	山 本 啓 一	病理学専攻 法医学講座	法医病理学。比較医事法学（主にドイツ）。
"	小 西 淳 二	内科系専攻 放射線医学講座	核医学・画像診断学に関する研究
"	山 岡 義 生	外科系専攻 器官外科学講座	消化器，特に，肝臓外科の安全性を追求する研究
"	本 田 孔 士	外科系専攻 感覚運動系病態学講座	各種の網膜病変に関して，その病態解明と修復機序に 関する機能学的，細胞生物学的，分子生物学的研究
"	遠 藤 克 昭	脳統御医科学系専攻 高次脳科学講座	神経系の機能再生に関する研究
"	柴 崎 浩	脳統御医科学系専攻 脳病態生理学講座	ヒトの高次脳機能に関する臨床神経生理学的研究
薬学研究科	中 川 照 眞	創薬科学専攻 薬品機能統御学講座	医薬品及び生体関連物質の分析化学，体内動態解析及 び構造・機能相関に関する研究

部 局	氏 名	講 座 名 等	研 究 分 野 等
薬 学 研 究 科	市 川 厚	生命薬科学専攻 生体情報薬学講座	炎症・免疫に関与する生理活性物質の作用発現とその調節機構に関する研究
工 学 研 究 科	内 藤 正 明	環境地球工学専攻 環境情報工学講座	環境問題に関する情報収集から政策提言までを総合的にこなう環境システム工学の研究
"	長 岡 弘 明	建築学専攻 建築計画学講座	建築基礎構造の力学的挙動に関する研究, 建築生産システムに関する研究
"	岡 崎 甚 幸	生活空間学専攻 人間生活環境工学講座	人間尊重型の生活環境を具現化するための生活空間環境システム設計法, 環境構成技術に関する研究
"	河 野 允 宏	生活空間学専攻 生活空間開発工学講座	地震動予測モデルの研究, 震源・地盤・構造物総合系の観点からの耐震設計法開発の研究
"	駒 井 謙治郎	機械工学専攻 機械材料力学講座	環境強度に関する研究, 画像処理フラクトグラフィ, マイクロマテリアルの強度と破壊に関する研究
"	鈴 木 健二郎	機械工学専攻 熱流体工学講座	エネルギー変換技術, 各種機器, 単結晶製造装置などに関わる伝熱工学的, 流体工学的研究
"	中 井 幹 雄	精密工学専攻 システム工学講座	機械システムにおける自励振動, 鳴き, カオス現象等の非線形現象の発生機構の実験的解明と理論解析法の研究
"	藤 尾 博 重	精密工学専攻 知能機械システム講座	光干渉法による機械加工面の面形状・精度測定に関する研究
"	荻 野 晃 也	原子核工学専攻 量子ビーム科学講座	原子核工学, 放射線計測学, 電磁波工学, エネルギー(特に原子力)問題, 電磁波問題に関する研究
"	樋 口 嘉 男	原子核工学専攻 量子物質工学講座	高エネルギーでの核子・核子相互作用に関する研究
"	金 澤 哲	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	放射線計測(中性子計測, 半導体検出器)および半導体に対する放射線照射効果に関する研究
"	井 上 紘 一	航空宇宙工学専攻 航空宇宙解析工学講座	制御工学およびシステム工学に関する研究
"	松 波 弘 之	電子物性工学専攻 機能物性工学講座	ワイドギャップ半導体物性制御とエネルギー変換デバイスへの展開に関する研究
"	小 久 保 正	材料化学専攻 無機材料化学講座	生医学材料としての無機物質の研究
"	橋 本 伊 織	化学工学専攻 化学システム工学講座	化学プロセスの計画・設計・運転・制御をより合理的に行うための方法論の開発とその実用化に関する研究
農 学 研 究 科	林 力 丸	応用生命科学専攻 応用生化学講座	生体高分子(タンパク質, 多糖類, 細胞膜)の構造と機能の解明と応用, 高圧力を利用する食品製造の研究
"	天 知 輝 夫	応用生命科学専攻 応用生化学講座	ヒト細胞膜の, 能動輸送ならびに細胞骨格・細胞接着に関わるタンパク質の構造と機能に関する研究
"	篠 崎 眞 輝	応用生物科学専攻 資源植物科学講座	アサガオの花成誘導に関する研究
"	坂 本 亘	応用生物科学専攻 海洋生物資源学講座	海洋生物の移動・回遊にかかわる環境の研究
"	津 田 盛 也	地域環境科学専攻 生産生態科学講座	植物病原菌類の病原学的研究 菌類の生活史制御と遺伝情報の解析
"	稲 本 志 良	生物資源経済学専攻 農企業経営情報学講座	多様な経営形態の農業経営の成長と安定に関する動学的観点を重視した経営学, 情報学, 会計学的研究
"	祖 田 修	生物資源経済学専攻 比較農史農学論講座	農林水産業の本質, ならびに農学の課題と方向, 方法論, 体系等, 農学のあり方に関する基礎論的研究
"	松 野 隆 一	食品生物科学専攻 食品生産工学講座	食品工学, 生体触媒工学, 生体成分の分離・精製に関する研究

部 局	氏 名	講 座 名 等	研 究 分 野 等
農 学 研 究 科	河 瀬 晃四郎	附属農場	鑑賞花卉の色素分析，促成技術の確立，大量増殖及び品種育成に関する研究
人間・環境学 研 究 科	松 本 澄	人間・環境学専攻 動態環境論講座	高圧環境における有機物質の動態，ヘテロ環化合物の合成並びにその化学的物理的及び生物的動態
"	後 藤 喬 雄	文化・地域環境学専攻 環境物性解析論講座	パルス核磁気共鳴法（NMR）を手法とした，低次元磁性体や分子磁性体の核磁気共鳴と低温磁性の実験的研究
エネルギー科学 研 究 科	中須賀 正 彦	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー物理学講座	理論プラズマ物理学に関する研究
"	井 上 達 雄	エネルギー変換科学専攻 エネルギー機能設計学講座	熱・弾塑性力学，とくに変態・熱・力学の理論とその工学過程への適用に関する研究
"	西 山 孝	エネルギー応用科学専攻 資源エネルギー学講座	資源エネルギーの供給システムに関する研究，資学地質学に関する研究，資源地球化学に関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	古 川 久 雄	東南アジア地域研究専攻 生態環境論講座	アジア地域学と，それに立った平和・環境保全の研究
"	石 田 紀 郎	東南アジア地域研究専攻 生態環境論講座	中央アジアにおける大規模灌漑が生態環境と社会経済におよぼす影響
生命科学研究科	大 山 莞 爾	統合生命科学専攻 細胞全能性発現学講座	ゼニゴケゲノムの分子生物学的研究
化 学 研 究 所	松 本 陸 朗	界面物性研究部門	界面電気化学的・表面間力の分散系の安定性，微粒子分散系生成および顕微鏡的界面物性相関表面構造の研究
"	綱 島 良 祐	材料物性基礎研究部門	高分子の希薄溶液物性と構造形成・ダイナミクスに関する研究
"	村 上 昌 三	有機材料化学研究部門	高分子の延伸による構造形成と物性の相関の研究
"	杉 山 卓	生体反応設計研究部門	有機単位反応開発学：希土類金属の化合物を用いた新規反応の開発に関する研究
"	柊 弓 紘	生体分子情報研究部門	蛋白質の構造変化と機能変化の研究
人文科学研究所	阪 上 孝	文化研究創成研究部門	近代ヨーロッパ思想史にかんする研究
再 生 医 科 学 研 究 所	鈴 木 康 弘	生体機能学研究部門	肺の微細構造と機能に関する実験病理学的研究
"	前 田 道 之	附属再生実験動物施設	ヒト血液細胞の悪性化増殖に関する研究 ヒト生殖系細胞の細胞生物学的研究
エ ネ ル ギ ー 理 工 学 研 究 所	大 引 得 弘	エネルギー生成研究部門	プラズマ物理，核融合に関する研究
木質科学研究所	野 村 隆 哉	木質バイオマス研究部門	竹炭・竹酢液，オイルパーム，竹の成長機構，複合半導体による環境汚染物質の分解に関する研究
防 災 研 究 所	高 橋 保	水災害研究部門	土石流等土砂の流動機構，流域土砂流出の予測と制御，及び土砂災害防止の研究
"	古 澤 保	附属地震予知研究センター	地震・地殻変動の観測とデータ解析に基く地震予知の研究
基 礎 物 理 学 研 究 所	益 川 敏 英	素粒子論研究部門	素粒子の性質・構造に関する研究ならびにそれを記述する理論
ウイルス研究所	和 田 千恵子	細胞生物学研究部門	大腸菌のDNA複製開始調節機構及びストレス応答機構の分子生物学的，ゲノム生物学的な研究
原子炉実験所	齊 藤 眞 弘	原子炉安全管理研究部門	トリチウムの環境動態と線量評価に関する研究

部 局	氏 名	講 座 名 等	研 究 分 野 等
原子炉実験所	藤 根 成 勲	原子炉安全管理研究部門	中性子ラジオグラフィとその応用に関する研究
"	河 合 武	中性子科学研究部門	冷中性子源・超冷中性子源の熱工学的研究並びに冷中性子・超冷中性子を用いた基礎物理の研究
"	米 田 憲 司	中性子科学研究部門	中性子ラジオグラフィに関する研究, 原子炉などの中性子源を使った画像撮影法に関する基礎的研究
"	小 林 圭 二	核エネルギー基礎研究部門	臨界実験装置を用いた原子炉物理学の実験的研究および物質・自然開発にかかわる倫理的問題に関する研究
"	工 藤 章	バックエンド工学研究部門	微量有害物質の環境での挙動に関する研究 - 仏アルプスのフッ素汚染から長崎原爆残留プルトニウムまで
"	井 上 信	応用原子核科学研究部門	原子核物理学および加速器科学の研究ならびにその原子力科学への応用研究
"	武 内 孝 之	附属原子炉応用センター	中性子放射化分析の基礎的および応用的研究
東南アジア研究センター	海 田 能 宏	政治経済関連研究部門	東南アジア・南アジア地域の生態資源利用技術の風土性, 及び農村開発研究
学術情報メディアセンター	藤 井 康 雄	教育支援システム研究部門	区間解析の応用に関する研究, 一般情報処理教育方法に関する研究。
生態学研究センター	成 田 哲 也	生態学研究部門	淡水無脊椎動物の生活史を中心とした生態に関する研究
放射性同位元素総合センター	青 木 達		放射化学的分析法を用いた, 重金属の環境汚染や環境放射能の動態に関する基礎的研究

平成15年度 予算案の概要

平成15年度予算編成は、昨年度に引き続き、「改革断行予算」とし、歳出全体について、実質的に昨年度の水準以下に抑制、歳出全体にわたる徹底した見直しを行い、予算の配分に当たっては、活力ある経済社会の実現に向けた将来の発展につながる4分野（「人間力の向上・発揮 教育・文化、科学技術、IT」、「個性と工夫に満ちた魅力ある都市と地方」、「公平で安心な高齢化社会・少子化対策」、「循環型社会の構築・地球環境問題への対応」）に予算の重点的な配分を行い、一般歳出を3区分し、「公共投資関係費」については、総額を対前年度3%の範囲内に抑制、「義務的経費」については、制度・施策の抜本的見直しを行い歳出の抑制を図り、「裁量的経費」については、前年度予算額から2%減算（科学技術振興費に相当する額を除く）した額を上限として縮減を図る、行政の構造改革を推進することとし、退職手当の支給水準の引き下げなど、総人件費を極力抑制する、という基本的な考え方にたって編成されているところである。

予算額案

区 分	平 成 14 年 度	平 成 15 年 度	比 較 増 減 額	増 減 率
国 の 一 般 会 計	8 1 兆 2 , 3 0 0 億円	8 1 兆 7 , 8 9 1 億円	5 , 5 9 1 億円	0.7%
国 債 費	1 6 兆 6 , 7 1 2 億円	1 6 兆 7 , 9 8 1 億円	1 , 2 6 9 億円	0.8%
地方交付税等	1 7 兆 0 , 1 1 6 億円	1 7 兆 3 , 9 8 8 億円	3 , 8 7 2 億円	2.3%
一 般 歳 出	4 7 兆 5 , 4 7 2 億円	4 7 兆 5 , 9 2 2 億円	4 5 0 億円	0.1%
文部科学省一般会計	6 兆 5 , 7 9 8 億円	6 兆 3 , 2 2 0 億円	2 , 5 7 8 億円	3.9%
（うち特会繰入）	1 兆 5 , 4 5 3 億円	1 兆 5 , 2 5 6 億円	1 9 7 億円	1.3%
国立学校特別会計	2 兆 7 , 8 2 9 億円	2 兆 8 , 0 4 5 億円	2 1 6 億円	0.8%
人 件 費	1 兆 4 , 6 9 5 億円	1 兆 4 , 7 4 2 億円	4 7 億円	0.3%
物 件 費	1 兆 3 , 1 3 4 億円	1 兆 3 , 3 0 3 億円	1 6 9 億円	1.3%

(参考)

区 分	平 成 13 年 度	平 成 14 年 度	比 較 増 減 額	増 減 率
国立学校特別会計 (うち物件費)	2兆7,428億円 1兆2,544億円	2兆7,829億円 1兆3,134億円	401億円 590億円	1.5% 4.7%

このような中で、文部科学省予算は、対前年度2,578億円(3.9%)減となっているが、義務教育費国庫負担金の対象経費の見直し及び人事院勧告の影響額を勘案すると実質的には前年度を上回っているところであり、文教・科学技術行政がまさしく重点4分野に該当し、歳出構造改革を推進するものとして重点的な予算配分がなされているところである。

国立学校特別会計の予算は、大学の再編・統合や国立大学法人(仮称)に向けた準備、国際競争力、地域貢献など大学の構造改革を一層推進するとともに、「国立大学等施設緊急整備5か年計画」の着実な実施や競争的研究資金の獲得による競争的環境の醸成など、国立大学等が直面する喫緊の課題に取り組む一方で、教育・研究経費の一層の効率化・重点化による見直しなど、歳出予算全般にわたり質的改善を図ると共に、これらの歳出予算の財源となる自己収入については、附属病院収入や授業料収入を増額しつつ、学校財産処分収入や雑収入等見込まれる収入を適正に計上されているところである。

なお、一般会計のうち大学関連の主なものとして

- ・21世紀COEプログラム 182億円 334億円(152億円増)
- ・科学研究費補助金 1,703億円 1,765億円(62億円増)
- ・経済活性化のための研究開発プロジェクト 115億円(新規)
- ・大学知的財産本部整備事業 24億円(新規)

などが図られている。

平成15年度 国立学校特別会計予算内示(本学関係)の概要

平成15年度国立学校特別会計予算内示の本学関係の主な事項の概要は、以下のとおりである。

区 分	教官数	学 生 数	備 考
(国立学校関連) 【大 学 院】 専攻の設置	人	人	
(工学)社会基盤工学専攻, 都市社会工学専攻, 都市環境工学専攻, 建築学専攻	150 150	修士 171 博士 75	(工学)土木工学専攻, 土木システム工学専攻, 資源工学専攻, 環境工学専攻, 環境地球工学専攻, 建築学専攻, 生活空間学専攻の廃止 (7専攻 4専攻)
(人環)共生人間学専攻, 共生文明学専攻, 相関環境学専攻	《12》 《12》 (2) (2) 136 136	修士 144 博士 85	(人環)人間・環境学専攻, 文化・地域環境学専攻, 環境相関研究専攻の廃止 体育指導センターの廃止
専攻の整備			
(理学)生物科学専攻	2 2		(理学)分子発生生物学研究センターの廃止
(医学)内科系専攻, 外科系専攻, 脳統御医科学系専攻	《9》	博士 6	
【大 学 等】 学科の新設		(17) 143 短大 160 専攻科 20	学科新設は15年10月とし, 学生受入れは平成16年4月とする。 医療技術短期大学部の転換
(医学)保健学科	53 53		
学科の改組			
(総人)総合人間学科			4学科 1学科 入学定員130人 130人

区 分	教官数	学 生 数	備 考
【教育実習施設】 (法学)法政実務交流センターの整備	(2)		
【附属施設等】 学内共同教育研究施設 フィールド科学教育研究センターの新設	26 26		(理学)臨海実験所,(農学)演習林,亜熱帯植物実験所,水産実験所の転換
高等教育研究開発推進センターの新設	13 13		高等教育教授システム開発センターの転換
基礎化学研究センターの新設	1 2		時限10年
京都大学桂地区等整備計画策定調査経費			
(大学附属病院関連) 【特殊診療施設】 地域ネットワーク医療部の新設	3 4		
探索医療センターの整備	6		
(研究所関連) 【附属施設】 (化学研)元素科学国際研究センターの新設	(3) 10 12		時限10年

教官数欄の()は客員《 》は連携を示し外数
学生数欄の()は3年次編入を示し外数

部局の動き

上海センター開所披露会

大学院経済学研究科は、附属施設として上海センターを設立し、平成14年12月5日(木)に看板の上掲式と披露会が行われた。

上海センターは、現代中国と東アジア経済についての調査研究拠点とし、中国経済全体をカバーするとともに上海経済を中心とする地域経済の調査研究を行う。また、中国経済との関連で、日本を含む東アジア経済全般についても調査研究を行う。それらの成果を社会に還元するため、地域社会に対し中国経済の動向、対外開放政策の変化等についての公開講座、講演会等を開催し、また、企業に対しては、中国の市場調査、産業調査に関する最新情報を適宜提供する。

当日は午後4時45分から、長尾 真総長を始め、関係者30余名の出席のもと、看板の上掲式が行われ、法経総合研究棟3階に設置された上海センター室を見学した。

また午後5時から、同2階の大会議室において、開所披露会が開催され、下谷政弘経済学研究科長の挨拶、山本裕美センター長の上海センターの紹介、総長の祝辞に引き続き、中村寛之助経済学部同窓会長の乾杯の発声の後、懇談が行われ、盛会のうちに終了した。

(大学院経済学研究科)



左から、山本センター長、長尾総長及び下谷経済学研究科長

大学院地球環境学堂・学舎・三才学林創設記念行事挙行

平成14年4月に設置された大学院地球環境学堂・学舎・三才学林の発足を記念した創設記念シンポジウム・記念式典・披露会が、12月6日（金）京都市左京区の国立京都国際会館において開催され、約300人の学内外の関係者が参加した。

最初に記念シンポジウムでは、「新大学院は何を目指すか」と題した宇沢弘文東京大学名誉教授による記念講演が行われた後、本大学院の理念と組織について本大学院松岡 譲、小林正美、中原紘之、嘉門雅史、松下和夫、横山俊夫各教授から報告があった。引き続き、浜中裕徳環境省地球環境審議官、日高敏隆総合地球環境学研究所長、中村正久滋賀県琵琶湖研究所長、あん・まくだなど農漁村フィールド研究家によるパネル討論を行った。

続いて行われた記念式典では、内藤正明学堂長による式辞の後、長尾 真総長の挨拶、工藤智規文部科学省高等教育局長、京都府知事（佐村知子副知事代読）、梶本頼兼京都市長、日高総合地球環境学研究

所長、スティーブ・ホールズ国連環境計画国際環境技術センター所長による祝辞があり、池坊保子文部科学大臣政務官ほか多数の祝電が披露された。

最後に披露会では、内藤学堂長の挨拶の後、江島義道大学院人間・環境学研究科長の祝辞に続いて、尾池和夫副学長の乾杯の発声の後、和やかに懇談会が行われた。

（大学院地球環境学堂）



京大病院で新駐車場・エントランス披露式挙行

京大病院では、このたび新駐車場が完成し、すでに完成していたエントランス（玄関ホール）とあわせ運用を開始するにあたり、平成14年12月8日（日）にその披露式を挙行了した。

式典は、田中紘一病院長の式辞、金田章裕副学長の挨拶、細田重好施設部長の工事概要報告に続いて工事関係者への感謝状贈呈の後、地元自治会、ボランティア、教職員等の関係者約100人が見守るなか、テープカットが行われた。

式典終了後、参加者は職員の案内により完成した地上駐車場及び地下駐車場を見学した。

新駐車場は、患者さんを中心として利用に供するもので、地上190台、地下180台の駐車スペースを有し、国立大学病院では類のない大規模なものとなっている。また、ホスピタルプラザを設け、地域の方々にも開放した広場を提供することとしている。エントランスは、「病院玄関として必要な各種機能」

を満たすとともに、病院の顔として患者さんをはじめとする利用者にとって、快適な空間となるように計画されている。

本院関係者一同は、今回完成した新しい施設を有効に活用し、大学附属病院としての使命を十分に果たすべく心を新たにしている。

（医学部附属病院）



寸言

産学連携への期待

藤原 菊男

若い夢を胸にいだいて京都大学の門をくぐったのは昭和24年であった。卒業は昭和27年であるから、今年でちょうど50年、半世紀になる。

経済学部での3年間は、“よく遊び、ときに学んだ”

日々であった。2, 3回生時代は、財政学のゼミで、島 恭彦教授のお教えをうけた。“東の大内、西の島”と並び称される斯界の泰斗であった島先生は、学問の面ばかりでなく、お人柄もスケールが大きく、私たち学生を枠に閉じ込めたりは、決してされなかった。私の故郷である丹後に先生とご一緒に旅したことが思い出に残っている。その島先生が、“藤原君、これからの人生にはいろいろ困難もあるだろうが、歴史の流れに逆らって棹をさすようなことだけはするな”とおっしゃった言葉を、今まで常に忘れずにきた。

卒業後、島津製作所に入社してからは、海外の仕事が多かったこともあり、大学とは長くご無沙汰していたが、最近、大学院・経済学研究科の赤岡 功教授にお会いする機会を得た。その折、階段教室などを久しぶりに拝見し、懐かしく、感慨を覚えたものである。

島津は、古くから京都大学との密接な連携によって技術レベルの向上を図り、最先端の製品を生み出してきた。明治29年、レントゲン博士のX線発見から10か月後に、二代島津源蔵が、京都大学の前身にあたる第三高等学校の村岡範為教授のご指導のもとにX線写真の撮影に成功したことは、産学連携の先駆けといえる。昭和17年に開発に着手し日本で初めて電子顕微鏡の試作に成功したのも、京都大学医学部との密接な協力関係があつての成果である。このような肝胆相照らす間柄の京都大学から、このたびノーベル化学賞を受賞した田中耕一氏を客員教授にお招きいただいた。これにより、大学と当社との新たなご縁が生まれた。うれしいことである。



私は、現在、京都工業会会長として、大学と産業界との産学協同の促進に力を注いでおり、今年は、京都の企業・大学・行政関係者が新産業創出への新たな枠組みを討議しあう京都産学公連携フォーラムをスタートさせた。京都工業会には、大企業はもとより中堅・中小企業など京都の400社余りの企業が参加しているが、それら企業の持つ高度なモノ作りの技術と、大学の保有する独創的な最先端研究成果、それに、国や自治体を加えた産学官連携が、新たな産業創出にむけて、ますます重要となっている。その産学官連携推進の中核として、私は、京都大学に大きな期待を寄せている。

企業が新産業創出に結びつく研究開発に取り組むには、巨額の費用を要する。当社は、幸い、初代・二代島津源蔵の築いた資産を支えとして研究開発に取り組むことができた。その結果、今回、ノーベル賞受賞という大きな花が咲いた。今後、資金やスピードなど、企業における研究開発を取り巻く環境は、ますます厳しさを加える。そうしたなか、次なる新たな産業創出につながる大きな花を咲かせるためには、今こそ、大学の有するすぐれた知と、それを製品化する産業界の技術と、そして、それらを支える国や自治体を含めた産学官の連携が、何より求められる。

そうした産学官連携を成功に導くために、大学には、知をもって産業界をご指導いただくと同時に、産業界により歩み寄ろうという姿勢をもっていたいただければと願う。これまで大学主導型の開発製品には、ややもすれば限られた需要となり、日本の経済を支える中堅・中小企業の発展につながりにくいきらいがあったようにも思えるのだが、その点いかなものだろうか。

また、学生の皆さんには、大学では基礎学力をしっかり身につけていただきたいと願う。田中耕一氏のノーベル賞受賞は、大学で培った基礎学力に、当社に入社後マスターした異分野の知識が加わってこそもたらされたものである。

そのためにも、大学の先生方には、より以上に学

生の自由な発想と行動力を認める姿勢を持っていた
だきたい。自由の中にこそ創造性がある。自分自身
の考えを持ち、自分の責任で自由に研究に取り組む
ことこそが、創造への第一歩である。田中氏のノー

ベル賞受賞を機に、そうしたことを強く感じている
次第である。

(ふじわら きくお 京都工業会会長・(株)島津製作
所相談役、昭和27年経済学部卒)

随想

習慣

名誉教授 吉田 修

近頃、貝原益軒(1630～
1714)を読んでいる。

翁は、「四書を、毎日100字
づつ100へん熟誦して、そら
によみ、そらにかくべし。

(中略)かくの如く、四書を
ならひ覚えば、初学のつとめ、
過半はすでに成れりと云うべし。論語は12,700字、
孟子は34,685字、大学は経伝を合わせて1,851字、中
庸は3,568字なり。一日に100字をよんでそらに記ゆ
れば、日かず528日におはる。17月18日なれば、1
年半にはたらずして其功おはりぬ。はやく思ひ立て、
かくの如くすべし。これにまされる学問のよき法な
し。其れつとめやすくして、其功は甚だ大なり。わ
がともがら、わかき時、此良法をしらずして、むな
しく過し、今八そぞになりて、年のつもりに、やう
やう学びやうの道すこし心に思ひしれる故、今更悔
甚し。」と、80歳を過ぎて書いた和俗童子訓(巻之三)
で述懐している。

益軒翁に比ぶべくもないが、私も67歳の今日、「今
更悔甚し」と思うことがある。それは『習慣』につ
いてである。翁は「凡そよき事あしき事、皆ならひ
よりおこる。養生のつつしみ、つとめも亦しかり。
つとめ行ひておこたらざるも、慾をつつしみこらゆ
る事も、つとめて習へば、後にはよき事になれて、
つねとなり、くるしからず。又つつしまずしてあし
き事になれ、習ひくせとなりては、つつしみつとめ
んとすれども、くるしみこらへがたし。」と養生訓
(巻第二)に書いている。



習慣について、Charles Reade(ビクトリア朝の小
説家)の言葉につぎのようなものがある。"Sow an
act, and you reap a habit. Sow a habit, and you
reap a character. Sow a character, and you reap a
destiny." (行動という種を蒔けば、習慣という収穫
がある。習慣という種を蒔けば、性格という収穫が
ある。性格という種を蒔けば、運命という収穫があ
る。)

また Plutarch(ギリシャの伝記作家)も "Character
is long-standing habit." という言葉を遺している。

敬愛する William Osler(アメリカ内科学の祖、
ジョンズ・ホプキンス大学医学部創設者の一人)は
医学生向けの講演「生き方」の中で、この点を強く
訴えて、次のように述べている。「『人生は習慣であ
る』、すなわち、人生は無意識のうちになかば習慣化
した行為の連続したもの、と言えるであろう。この
偉大な真理は、精神的なもの、肉体的なものを問わ
ず、あらゆる行動の基盤となるもので、卓越した道
徳は習慣より生まれる、とするアリストテレスの教
えの中心思想をなすものである」と。

若い頃、習慣の重要さを十分に認識せず、それが
あらゆる行動の基盤をなすものとは考えず、むなし
く過した。「年のつもりに、やうやう学びやうの道
すこし心に思ひしれる故、今更悔甚し」ではあるが、
今からでも遅くはないと思っている。

若き友よ！前者の轍を踏むなかれ。
(よしだ おさむ 元医学部教授、平成9年退官、
専門は泌尿器科学)

居心地がよかった京都大学

名誉教授 武部 啓

1) 京大らしさ

京都大学には21年余り在籍した。最初は放射線生物研究センター（放生研）に約6年、その後医学部、医学研究科で定年まで教え、研究した。その前は大阪大学医学部に約13年（その間2年半アメリカ留学）、ジョンス・ホプキンス大学（アメリカ）に2年半（日本からの出張ではなかった）、東京大学理学部に学生時代を含めて約8年だから、京大が一番長い。



京都大学に移ったころ、東大、阪大と比べてどうですか、とよく尋ねられた。私の答えは、東大は日本一を自認している、阪大は世界をめざすと公言している、京大は哲学の道を歩きながら真理を探究している、であった。この印象は今も変わっていない。京大には、東大や阪大には絶対に居ないタイプの方々があられた（最近では減っているのが淋しい）。いつも和服の先生（複数）、教授室が畳敷きで、冬になると、これでないとアイデアが浮かばないんだ、とこたつにあたっている先生（用務員室と交換したとか）、日暮れから夜明けまで毎夜タヌキの檻の前に座り込んで、じっと観察している研究員（女性）など、理学部には特に不思議な方が多かった。だからノーベル賞がとれるんだよ、と胸をはった先生もあった。自己点検の報告書（私は副委員長として作成に参加）の題が、「自由の学風を検証する」（自由「な」か「の」かで少しもめたが）と決まったのも、「京大らしい」と委員会は自画自賛した。

それに比べると医学部構内は普通の人が多かったようであるが、研究となるとすさまじい意欲と情熱が感じられた。臨床医学でも同じで、たとえば生体肝移植をめぐる心、技、体そして学問の物語りは、最近刊行された岩波新書「生体肝移植 京大チームの挑戦」に詳しい。私は倫理委員会のメンバーとして、別の立場から見ていたが、当時の小澤和恵教授らの、高度の研究と卓越した技術に裏付けられた、新しい医療への真摯な態度に敬服した。

2) 医学部とRI

私が医学部で担当した講座は、前任の教授の頃から放射性同位元素（RI）の管理を受け持っていたので、着任と同時に引き継いだ。教授選考では、次々とRIを使う教授が選ばれ、中には就任の条件として、RI設備の増設を要望（と言うより要求）する人もあって、学部長からすぐあの部屋を改造してくれ、と難題を押し付けられたりした。RI施設や予算の拡大に批判的な教授が学部長に選ばれた時には、危機感を抱いたらしいRI利用教授たちが、私を評議員にと運動し、実現してしまったこともあった。幸い教授会の理解と支持、それに文部省の支援を得て、最大時には5施設、計約6,000平方メートル（当時の文部省基準は660平方メートル）の日本一の医学部RI施設になり、多数の研究者が世界一きびしい日本のRIの法律を、完全に遵守できる体制となった。皮肉なもので、その直後から蛍光色素がRIに代わって利用されるようになり、広すぎると批判されるようになった。

3) 倫理委員会 遺伝子解析の生命倫理

医学部在任中にはあまり熱心に取り組まなかったが、上述の倫理委員会の経験者という理由で、定年退職後に、かつての同僚の元教授らから依頼されて、いくつかの研究所などの倫理委員会にかかわらざるを得なくなった。1992年からヒトゲノム解析国際組織（HUGO、ヒューゴ）の国際倫理委員会の委員になっていたこともあって、私はいつのまにか遺伝子解析の倫理問題の専門家扱いされるようになってしまった。HUGO倫理委員会では、私以外は全員が欧米・オセアニアの委員で、ユダヤ・キリスト教的な声明書を出すのに、私一人が激しく反発したことがあって、それ以後今年4月まで副委員長をつとめた。倫理問題の討議に役立つのは、医学部（医学研究科）教授としての経験に加えて、京大着任前のことではあるが、中、高、大学での自治会活動であり、大学紛争中の議論であったりするのだが、と申せば、京大の居心地がよかった、との私の言葉に共感いただける方もあるのではないだろうか。

（たけべ ひらく 元医学部教授、平成10年退官、専門は遺伝学、放射線生物学）

洛書

感謝と思い出

林 力丸

洛書きは落書きに通ずると思ひ、軽い気持ちでお引き受けしたが、どのような分野にも超一級の専門家がおられるこの大学で、専門外のことに筆を揮うなど恐れ多いことにふと気づいた。そこで、今一番述べたい「感謝」を記すことにした。



私は本年度をもって退官となる。当時はまだフロンティア精神の名残のある北海道大学理類に憧れ、その農学部を出て、お椀の船に箸の櫂とひやかされながら上洛し、本学農学部の修士課程に入学・修了。以後38年間も居ついてしまった。大変なお世話になったものである。「関東人が都で長くいれるとは、意外に芯が強いね」といわれる。

始めの27年間は食糧科学研究所で過ごし、後の11年は農学部の本館に居を構えた。数年前、宇治移転後も使われていた研究所の建物が取り壊されるのを眼下に見ることになった。晩秋のすっかり葉を落としたメタセコイアの巨木の向こうに砂利だらけの小さな更地が残り、そこに一台のシャベルカーが頭を垂れて放置されて、冬になると雪を頂き昆虫の死骸に見えた。亡き先生方を思い出し、「兵どもの夢のあと」と一涙せざるをえなかった。

学部は実に多忙であり、学生ばかりか教官の事件もあり、厳しく恐ろしいところに思えた。3、4回生への専門講義はつらいが、研究室は常に学生があふれ、「失敗は元々」と冒険的テーマを共に悩むのは楽しい。私の修士論文のテーマは「最近生化学がはやっているが、君は死から生を見たらどうかね」というものであったのだから。

学生には申し分なく優秀なものがいる。論文形式の試験をやるとそれがよくわかる。しかし、試験上手や要領のよさに過ぎないものも多い。落ちこぼれるものもかなりいる。高校生の150人に1人の割合で選ばれているのに、それは若い一時の輝きであることを忘れ、地道な努力を怠るからであろう。

農芸化学科にもこの10年間に女子学生が急増し、今年の1回生は50名中19名を占める。わが研究室にも始まって以来の多くが集り、常に40パーセントほどを女子が占めた。葵祭の斎王代、3回生で大学院に入る「跳び級ちゃん」など多士多才なのが嬉しい。残念ながら大学院を出た彼女らの多くは、苦労して入った会社を数年で辞し、特許事務所などに転職する。女子教育の職に就けたら秀抜であるのは間違いないのに、その職は旧女子師範系大学の勢力が強い。学会で活躍を続ける女子卒業者は極めて少ない。

東京の会議に行き一言ないともったいないと思ひ、学内会議では月給に見合う一言をと思ひ、要らぬことを口にしたように思ふ。しかし、学部教授会は4、5時間の沈黙にひたすら耐えた。こっそり居眠ると、どこからか学生が見ていて、「うちの先生上手に寝てはる」と笑ふ。

研究は精一杯成果を挙げた。先生から引き継いだ仕事のうち、死から生命を見る研究はドイツ人からメッカと言われる立場を守ったし、酵母の分子生物学の兵站としてなくてはならない役を果たした。ロックフェラー大学の伝統を引き継いだ核酸分解酵素の仕事にも一石を投じることができた。独自に始めた高圧バイオサイエンス・バイオテクノロジーの仕事は国内会議を数度行いながら日欧共同会議に発展し、今は3度目の国際会議をブラジルで開催しようとしている。これらすべて研究室員はもちろん優秀な学生の力があずかっている。関わった皆が誇りに思つて良い。

クラーク博士は滞在9ヶ月で名言を残して去った。私は「お世話になりました」の一言である。

(はやし りきまる 大学院農学研究科教授)

訃報

このたび、伊藤鐵夫^{いとうてつお}名誉教授、田中謙二^{たなかけんじ}名誉教授、貝原基介^{かいはらもとすけ}名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

伊藤 鐵夫 名誉教授



伊藤鐵夫先生は、平成14年11月13日逝去された。享年89。

先生は、昭和14年京都帝国大学医学部を卒業、同22年同大学医学部講師、同23年山口県立医学専門学校教授、同32

年より広島大学医学部教授、同38年京都大学医学部教授に就任、整形外科講座を担任された。昭和52年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は昭和53年より平成4年まで京都市立身体障害者リハビリテーションセンターの所長として福祉と医療のために尽力された。

先生は、整形外科及びリハビリテーション医学全般について多くの研究成果を残されたが、特に関節外科・末梢神経外科及び脳性麻痺の病態については多大の顕著な業績をあげ先導的な役割を果たされた。

主な著書として、退官後編集した著書「股関節外科学」があり、股関節手術の指針を示すものとして高く評価されている。

また、昭和40、47年中部日本整形外科学会災害外科学会会長、同42年日本手の外科学会会長、同44年日本先天異常学会会長、同50年国際整形外科学会京都会議副会長、同51年日本整形外科学会会長等を務められ、またわが国において人工関節に関する研究を推進する目的で人工関節研究会を発足された。国際的には昭和41、44、47、50年と引き続いて国際整形外科学会で講演を行われ、同50年には同学会の学術集会の副会長としてその運営に携り、これらを通じて国際的学術交流に重要な役割を果たされた。これらの一連の研究教育活動、学会活動により、昭和61年11月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院医学研究科)

田中 謙二 名誉教授

田中謙二先生は、平成14年11月17日逝去された。享年89。

先生は、昭和12年京都帝国大学文学部文学科を卒業、同年文学部副手、岡山県立閑谷中学校教諭を勤め、同14年に外務省所管財団法人・東方文化研究所嘱託員、ついで助手に就任、故吉川幸次郎、入矢義高氏とともに中国元代の戯曲である元曲の研究につとめられた。その成果は、後に『元曲選釈』として公刊された。昭和19年より翌年にかけて北京に留学、帰国後は、京都大学教養部助手、助教授を経て、同31年人文科学研究所に配置換え、同44年に教授に就任、芸術史部門を担当された。この間、元曲、元典章、朱子語類などの共同研究を主宰し、同37年に「西廂

記研究」により文学博士号を授与された。昭和51年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その後、関西大学文学部教授に就任、昭和56年まで勤められた。

先生は中国近世の戯曲をはじめとする口語文献研究の第一人者で、難解をもって聞こえる数々の文献を校訂、解説され、その業績は内外より高い評価を得ている。著書には、『言葉と文学』、『朱子語類外任篇訳注』などのほか、『田中謙二著作集』全3巻がある。また日本中国学会理事などを歴任、学界の発展にも尽力された。

(人文科学研究所)

貝原 基介 名誉教授



貝原基介先生は、平成14年11月26日逝去された。享年87。

先生は、昭和16年京都帝国大学農学部農林経済学科を卒業、入営・応召・召集解除を経て、京都大学大学院入学、同大学院特別研究生、米国ウィスコンシン大学に留学して Ph. D を取得、明治学院大学経済学部助教授、同40年に京都大学農学部附属農業簿記研究施設教授に就任の後、同47年からは農学部農林経済学科で農業経営学講座を担当された。昭和55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、農学部附属農業簿記研究施設長、京都大学評議員、同大学院審議会審議員として大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、関東学園大学教授・同大学院経済学研究科長、岡山商科大学教授を務められ、私学振

興にも尽力された。

先生は、農業経済学、とくに農業経営学に関する分野において、農業経営学の体系化に関する研究、農業簿記利用による農業経営の診断・計画手法の開発に関する研究、農地改革の成果に関する研究など、優れた研究業績を残され、農業経営学の発展に寄与されるとともに、京都大学農学部と米国ウィスコンシン大学マディソン農学・生命科学部とのあいだの研究と教育についての学術協定締結の礎を築かれるなど、国際学術交流にも情熱を傾けられた。

また、農業経営研究会会長、関西農業経済学会会長として、いずれも学会の組織改革に取り組みられ、抜本的な改革を進めて運営体制の整備を図り、登録学術団体へと発展させるなど、学会運営への貢献を通じて学術振興に多大な貢献をされた。

(大学院農学研究科)

日誌 2002.11.1 ~ 11.30

11月5日 評議会

〃 附属図書館商議会

8日 同和・人権問題委員会

11日 学生部委員会

15日 于 鷹 中国科学技術省国際協力局長他
8名来学、総長他と懇談

18日 入学者選抜方法研究委員会

19日 評議会

20日 国際交流委員会

21日 11月祭(24日まで)

22日 京都大学広島講演会

26日 大学入試センター試験実施委員会

お知らせ

シンポジウム「法科大学院における実務基礎科目の教育」の開催

日 時 2月1日(土)午後1時～5時

場 所 法経第一教室(法経本館)

趣 旨

法科大学院は、平成16年4月の授業開始を目指して、設置予定の各大学等において授業内容の検討等の準備が鋭意進められている。法学研究科附属法政実務交流センターでは、法科大学院における実務基礎教育の在り方に関する共同研究の一環として、当該科目の教育内容・方法に関するシンポジウムを開催する。

プログラム

1. 挨拶・趣旨説明

2. 報告

(1) 検討の経緯・実務基礎科目全体の構成

磯村 保 神戸大学大学院法学研究科教授

(2) 民事実務関係 笠井正俊 京都大学大学院法学研究科教授

(3) 刑事実務関係 酒巻 匡 上智大学法学部教授

3. 裁判官、検察官、弁護士、研究者等からのコメント

4. 質疑応答

5. まとめ

申込み及び問い合わせ先

京都大学法学部事務局 TEL 753-3243(園田) FAX 753-3290

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.law.kyoto-u.ac.jp/l-LSympo.htm>

編集後記

大学も、「象牙の塔」を気取ることなく、産業界との協同にも積極的に取り組まねばならない。そのためには、教官の受賞などは恰好の宣伝材料になる……。一昔前にはあまり大っぴらに言うべきではないとされていたようなことが、今ではいたるところで声高に語られている。むろん、広報委員会もそういう時代の変化を無視するわけにはいかず、むしろそれに応じた広報のあり方を積極的に探っているところだ。しかし、究極的には、研究・教育というのは無償/無賞の行為ではなかったか。そのことを決して忘れることなく、広報誌の編集という無償/無賞の行為を続けていきたいと思う。

(浅田記)